反動の嵐に抗して！	２０１２年 ５月９日 No１５	JR 東海労働組合 大台両所分会 発行者　西村泰弘 編集　　教宣部

小出裕章助教授との意見交換会に参加！！

４月２４日に JR 東労組の取り組みである、京都大学原子炉実験所(大阪府熊取町)で行われた、小出裕章助教授との意見交換会に新幹線関西地本の仲間のみなさんと参加しました。
意見交換会では、小出さんより「たとえ少量の被爆でもガンにかかるリスクはある」など、「放射能による被爆」がいかに危険なものなのか？というレクチャーを受けました。

地震大国の日本に原発はいらない！！

東労組のみなさんからは、被災地付近まで列車の運行を行っているが、どうすれば被爆から逃れられるのか？など、被災地の職場からの率直な意見が出され、地震大国の日本に原発は必要がないことなどを参加者全員で確認しました。
最後に小出助教授より、自分の信条にしている言葉を教えてもらいました。「生き物は一回しか生きれない。どうせ一回しか生きれないのなら、生きたいように生きるべきだと思います。」その後、東労組の仲間のみなさんと場所を変え、小出助教授との意見交換の感想や、それぞれの会社の職場報告を行い、職場からいかに運動を作っていくのか意見交換を行い、交流を深めました。

敦賀原発の下活断層か

2号機、廃炉の可能性

日本原子力発電の敦賀原発2号機（福井県敦賀市、定期検査で停止中）の直下を走る断層が活断層である可能性があることが24日、経済産業省原子力安全・保安院の現地調査でわかった。日本原電側は断層は動かないと主張してきた。国のルールは地震で動く断層の真上に原子炉を建てはならないと定めている。敦賀原発2号機は廃炉となる可能性が出てきた。

▼3面＝「動かぬ」主張覆る

日本原電によると、敦賀原発の敷地内には判明分だけで約160の断層が見つかっている。この日は、保安院の意見聴取会のメンバーである産業技術総合研究所と東大、福井大の専門家4人が調査を実施。1、2号機と3、4号機の建設予定地、日本原子力研究開発機構の新型転換炉（ふげん）＝廃炉作業中＝付近の6地点の斜面などを調べた。

その結果、2号機の原子炉の直下にはほぼ南北に走る断層について「地震が起きた場合、ずれる可能性が否定できない」などの意見が相次いだ。敦賀原発の敷地内では活断層の「浦底断層」が確認されており、4人は、浦底断層が地震を引き起こした場合、原子炉直下の断層も同時に動く可能性が高いとの見方で一致した。保安院の小林勝・耐震安全審査室長は、過去に断層が動いた可能性を指摘し、「比較的新しい時代に浦底断層に引きずられたのではないか」と話した。

一方、日本原電は、原子炉直下の断層は自ら動いて地震を起こしたことはない▽計算上は浦底断層が動いたとしても断層が動かない―などと説明。「耐震設計上、考慮すべき断層ではない」として、断層が動く可能性を否定してきた。しかし昨年の東日本大震災の後、福島県内でこれまで動かないとされた断層が動き、見直し議論が起きていた。

保安院は日本原電に改めて活断層の調査を指示。小林室長は「新たな調査結果が示されない限り、今回の調査で判断する。調査した断層は浦底断層に引きずられて動く可能性が高い」と述べた。（小堀隼人、宮本英樹）

敦賀原発

日本原子力発電が2基を設置。2号機は1987年2月に営業運転を開始した。1号機は70年3月、日本初の商業用軽水炉として運転を開始。2009年に国から40年超の運転継続を認められ、16年まで運転する計画だった。

現在は2基とも定期検査中で、再稼働の見通しは立っていない。04年に国に3、4号機の増設を申請し、国が安全審査中。

活断層

地震学的に新しい時代にずれ動いた跡があり、今後も動く可能性がある断層。原発では12万～13万年前以降に動いたことが否定できない場合に活断層として扱われ地震想定に反映される。地震は活断層の地下深い部分がずれ動いて起こる。地表で複数の場所に露出が現れたり隣にある小さな断層が動いたりすることもある。これらも広い意味で活断層として扱われる。

直下の断層が活断層である可能性がある敦賀原発２号機（中央）＝福井県敦賀市、本社ヘリから、飯塚晋一撮影

子供たちの未来のために、永遠に原発０の世の中を目指しましょう！！